

家集、特に主情歌と徒然草

榎園

久

吉田兼好が徒然草の作者であることは周知のことであるが、兼好は、公的にはむしろ歌人としてその生涯をすごすのであって、兼好

法師自撰歌集をのこしている。貞和二年、風撰雅集撰進を前にして、自ら編まれたというこの家集は、彼六十四才の回顧であり、二八七

首（富倉徳次郎類纂評釈徒然草による）の歌のひとつひとは、さながらその生涯を点描するかに見える。しかしながら、こうした自撰家集に表われる兼好の作家像は徒然草のそれと必ずしも同一ではない。そこには徒然草に見ることの出来なかつた新しい兼好の一面があり、また明らかに矛盾と認められるものさえある。そして、このことは徒然草の立体的理解と無縁のことではない。以下、ここでは主点を差異の面において家集と徒然草とのかかわりにつき少しく考えてみることにしたい。

兼好の歌は、勿論、「薄暮帰雁（六〇）ゆきくるよくもちのすゑにやどなくばみやこにかへれ春のかりがね」一（四五）春さめにやなぎのいとほそめかけつ花のにしきをはやもおらん」その他、一一八、一四七、一四九、一五五、一六一、一六四、一七八、一八六、二〇二、二二六、二三七、二三九、二五二、二七〇、二七一、二八四番等からもうかがえるように、明らかに、古今、新古今の文学伝統の発想によっているものが多く見られる。また、家集の第一首の歌が、「春のころより来むといふ人の秋になるまでとはぬに（一

春もくれ夏もすぎぬるいつはりのうきは身にしむ秋のはつかせ」という、春からよみ出した秋まで一首に歌つた技巧をほこる歌であることは、兼好の歌についての意識を物語つていとも考えられる。しかしながら、先に引いた六〇番歌が「ちと俳諧の体をぞ詠」（「近來風体抄」）み、同様のことが二六九番にもいえること、二三三番が思察的になわが心理を見ていること、さらに二四一、一七〇番等が自れの生きる変わりゆく時代を詠んでいること、このような兼好の新局面に会うに至って、「其の比は、頓、慶、兼三人、いづれも上手といはれしなり。…兼好は此の中にちとおとりたるやうに、人も存せしやらん。」（「近來風体抄」）「景氣の歌は頓阿まさりしかどもまことの仏心無常は兼好にしくものあらじ」という兼好が何にすぐれ何におとっていたかがわかるおもしろいがある。

さて、白石大二氏は、家集と徒然草との内容上文辞上の関連について、早く「通覧すると、家集は内容上徒然草の素材をなしている観がある。」（「兼好法師論」）として、例に、徒然草二十六段前半「風も吹きあへずうつろふ人の心の花になれにし年月を思へば、

あはれと聞きし言の葉ごと忘れぬものから、我が世の外になりゆくならひこそ、なき人の別れよりもまさりて悲しきものなれ。」の部分と、家集二十八番「あだ人にならひひけりなたのみこしわれもむかしのころならぬは」六十一番「わればかりわすれずしたふ心こそなれても人にならばざりけり」とを、また、他に百五段と三三番をあけていられるわけであるが、はたしてこれは類似の点から一面的にみておいてよいものであろうか。

ここで、家集十二番（ふかくきにかよひしころ…）、四七番（人にもいひそめて）四八番（つらくなりゆく人に）等の弱々しい歌と、徒然草三段、百七段の説き方の差異に注目しよう。つまり、「よろづにいみじくとも、色好まざらん男はいとさうざうしく、玉の杯の底なきこちぞすべき。露霜にしはたれて、所定めず感ひありき、親の諫、世の謗をつつむに心のいとまなく、あふさきるさに思ひみだれ、さるは、独寝がちに、まどろむ夜なきこそおかしけれ。さりとて、ひたすらたはれたる方にはあらで、女にたやすからず思はれんこそ、あらまほしかるべきわざなれ。」（三段）の説示の仕方と歌との屈折であるが、この説示の構造には説示するものと説

示されるものとの設定があるように見受けられる。即ち、〆露霜にほたれて：まどろむ夜なき、まではいいが、女にたやすからず、おもわれる者と、説示者との構造である。これは、今ふれる余裕はないが五十九段の構造において一層明らかで、たちどころの出家をすずめる説示者と、万事を捨てきれぬ者との構造がみとめられる。そして、家集にみられる兼好像はむしろ、徒然草の説示者よりも説示をうけるものに近いということが指適せられてくる。一段、二段をうけついで「あらま

ほしき」事として書いた三段、さらに百七段からうけるむしろ説示者といつてよいほどの兼好像と、家集のそれとは、例えばこのような差異が認められてくるのである。こうしてみるとこの随筆化の仕方、莞展の仕方が注目されねばならないことになってくる。

説示性、これは徒然草の性格を認められてよいのである。即ち初段からほぼ十余段までかなり高い調子で、一般化された主題を、若々しさまでまじえてかきすすんだ筆致は、その後三十段ほどまで調子をおろしつつも続いていくが、三十一段から具体化された私記録風にかわる。そして三十八段にいたると、その書きぶりはいよいよ説示的性格を

強めてくる。「ただし、しひて智を求め、賢を願ふ人のために言はば」(三八段)のいい方は、老莊思想を背景にした、説示者としての兼好の姿勢をよくあらわしているといえるだろう。こうした意識した説示、巧みな例話は徒然草のいたるところにみられることである。また兼好は、涅槃會の聴聞(二百三十八段)をしている。

さて、中でも一等強く説かれているのは何といつても出家論である。そこには強い語気で説示する兼好の姿がある。老来りて始めて道を行ぜんと待つことなかれ。古き頃、多くはこれ少年の人なり。」(四十九段)「人はただ無常の身に迫りぬる事を、心にひしとかけ、つかのまも忘るまじきなり。」(同)「人と生れたらん験には、いかにしても、世を遁れん事こそあらまほしけれ。」(五八段)「大事を思ひたたん人は去りがたく、心にかからん事の本意を逃けずして、さながら捨つべきなり。」(五十九段)等がそうであり、兼好は、こうして「つれづれわぶる人は、いかなる心ならん。まぎるるかたなく、ただ独りあるのみこそよけれ。」(七十五段)と

のべる。勿論これも外典(摩訶上観)の引用で結文するが、「吾が生既に蹉跎たり。諸縁

を放下すべき時なり」(百十二段)、兼好の心情を経過している部分はある。

ところで、このような峻しい徒然草の兼好に對して、家集に表われる兼好像は、「世をそむかんとおもひたしころ秋のゆうぐれに、(三四)そむきてはいかなるかたにながめまし秋のゆうべもうき世にぞうき」、「ほいにもあらでとし月へぬることを、(三六)うきながらあればすぎゆく世の中をへがたきものとなにおもひけむ」、「ともすればにはのうきすのうきながらみがくれはてぬ世をなげくかな。」

出家しようと思いつつもそのまま年月を経、この世を憂きものと思いがらもとかく身を出里にかくしきつてしまわぬ、まるで「おはやうの人」(五十九段)のような兼好の出家までがおもわれる。又、出家しても「(五六)はなのいろは心のまゝになれりけりことしげきよをいとふしるしに」と詠みつつも、「(四三)かくしつづついかざりとしらま弓おきふしすぐ月日なるらん」(四三)ながむれば春雨ふりてかすむなりけふはたいかにくれがてにせむ」「あはれなる夢を見てうちおどきたるに語るべき人もな」(二三〇)いような生活をおくっている。その山

里のすまいは「いかにしてなぐさむ物ぞよの
中をそむかですぐす人とはばや」(五五)
といいつつも、身をならし、さびしさをな
らす孤独とのたたかひの日は長く、また多か
ったのであらう。作家の生成がみられるよう
であるが、「そう正返し(一〇五)ことわり
やあまつ空よりふく風ぞもりのこのはまつ
さそひける」、そうした心持を僧上はよくこ
ろえているのである。このように家集の兼
好は、およそ「ひたぶるの世すて人」とは、異
り、ふるさと人の訪問を「いとうるさし」
(一三一)と思いつつも「されどかへりぬる
あとさうざうし」(一三二)というのであ
り、また山にあつても「すめばまたうき世な
りけりよそながら思ひしままの山里もがな」
(八一)「いまさらにおもひすてにし世をば
うらみじ」(八三)と思ひ、また市井にあつ
ては「いづかたにも又ゆきかくればやと思ひ
ながらいまは身を心にまかせたればなかく
におこたりてのみすぎゆく」(二三四)この
ような兼好像をあらわしてくるのである。

3

こうした家集、徒然草作家像の差異の理解
はいかん。この点、考えの途中に属するが、
私見を簡述してみると、一つは、家集二四七
番から徒然草二十段に例をみとめられる、和
歌から散文の随筆への客観化の傾向へ帰せら
れるものようであり、第二には、徒然草の

説示的性格が考えられる。先に説示にみられ
る構造を考えたが、さらに又、徒然草に登場
する人達が四十一段の雑人对兼好、九十三段
の皆人对かたへなるものに例をみるように、
大きく、無常をとくものと、無常をきくもの
とに分けられることはこれに関連をもち、そ
して、兼好が「かたにも無常を観ずる事なか
れ」(二百十七段)という大福長者の存在を
知っているだけに一層、時代の常識の中でと

く徒然草の説示的性格はきわだつてくるとい
える。

以上ここでは、徒然草の立体的理解の為の
ひとつの試みとして、家集と徒然草にみられ
る作家像の差異をとりあげた。これらは勿
論、兼好の文学に関わる問題として一層勉強
されねばならないが、それは今後二期するこ
とにして、こゝらでひとまず筆をおくことに
したい。